

「こんにちは」 してきます。

わだいのしゅう

人事交流

シナジー (synergy) とは共同作用や相乗作用を表す英語からきています。

80年代から90年代にかけて、企業活動の中でシナジー効果という表現がよく使われたと記憶します。同時期に目立った事業の多角化は、関連部門や異なる部門に展開して経営上の相乗効果を図ったものです。

他事業間では技術や販路、経営管理、社風などが異なるはずで、そのリスクを上回る効果を期待しています。異業種交流や異文化交流なども同義

でしょう。別々の価値が出合うことで、1+1=3以上になることと理解できます。

和歌山大学では、平成22年度から和歌山県と和歌山市との間で人事交流を始めました。大学と県や市とはいろいろな部門で共同・協力事業を行ってきていますが、その現場に「人」を送り込んで各内部から具体的な連携を行おうというもの。もちろんその目的はシナジー効果です。

第1号は、県庁からは高井廉之さん、和歌山大学からは上續勝也さんで、2年の交流を終え、今は

第3の男

元の職場に戻っています。翌年には和歌山市から稲垣智久さんが和歌山大学へ、現在は第3陣としての人事交流が行われていますが、全員40歳前後の人材で、主として大学の地域連携部門や県の産業振興部門に配属されています。

社会の幸福

大学の第3のミッシェンとされるものが社会貢

献。大学の知見や教育機能を地域のために活用しようというものです。では、県や市の基本的なミッションとは何なのでしょう。高井さんは「公共の福祉のための奉仕者。県民、市民の皆さんが幸福に生きるためにいろいろやりなさいということですよ」と地方公務員法を分かりやすく解説してくれました。

なるほど、では、大学と自治体の連携の意味は「幸福」というキーワードで語れそうです。連携は言うは簡単ですが、そこから即効性ある「皆が幸福になる」結果を求めるのは非常に難しい。工学研究でいえば、



和歌山大学キャンパス内での稲垣さん

大学は教育を



活動報告をする高井さん

基本にうんと川上の基礎的な研究をしていることが多い。県は今と近未来の経済活性化を目指し、産業側は時代のニーズに合った製品を「早く」実用化したい。それでないとマーケットで勝負にならないからです。それぞ

れ社会に対する立ち位置が違いますから、人事交流で派遣された方々も期待と現実に苦勞されたのではないのでしょうか。社会全体に投資意欲が減退している時には、既存の領域でお互いの価値観を主張していても解決の糸口が見えにくい。だからこそ「外部の新しい血」と「内部の経験」の相乗効果で新しいアイデアを期待するのです。大学と自治体との人事交流を進めた堀内副学長は「10年の交流を蓄積すると大学を経験した人材は10人になる。彼らが自治体で幹部になった時に連携が実体化するだろう」と語ります。同時に外部を経験した大学人も10人となり、合計20人の「第3勢力」が生まれる計算になります。これは非常に得難い価値集団ではないでしょうか。「地域の幸福」を追求するための新しい勢力になるはず。稲垣さんは和歌山市での子ども時代、地区一番のマラソン選手だったとか。息の長い勝負には強そうです。双方の「違い」が分かる第3の男たち(実は女性もいます)に、10年後の和歌山県を期待したい。とても楽しみです。

プロフィール



湯崎 真梨子(ゆざき・まりこ)
和歌山大学地域創造支援機構 特任教授、地域創造支援マネージャー
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。